

## 現場の新幼稚園教育要領

原口純子

『幼児の教育』第八十九巻第十二号

(一九九〇年) から

教育要領が変わったと言っても、遊びを通して自主性を育てる保育を旨として来た本園にとって、保育の在り方や方法が変わるわけ

ではない。むしろ日の当たらない時代から続けて来た我々現場の保育の実態により沿った方向で変わったことは喜びでもある。かつての六領域全盛の時代を思えばどんなに生きやすく、保育しやすくなったことか。しかしそれでは三十九年の教育要領が好ましくからざるしろものだったかと言えば、必ずしもそうではなかったと思う。問題はその解釈と運用と指導にあったのではないだろうか。子どももしっかり視点を置いて、子どもにとって望ま

しい保育を求め続けるならば、教育要領が変わる度に右往左往することはない。今回の改訂の中で幼稚園教育の基本が、

1、幼児期にふさわしい生活の展開

2、遊びを通しての総合的な指導

3、一人一人の発達の特性に応じた指導  
となっていることは、実に日本の幼児のため  
に同慶の至りである。

☆

教育要領の改訂にともない、説明会や様々な論説を通して、改めて保育について学び、見直しの機会を得たことは有難いことである。現在行っている我が園の保育が全体の方向としてはそう間違ったものではないと思うものの個々の活動を見直して見ると、行事にまつわる活動の問題の多いことがわかった。母の日、父の日のプレゼント製作、夏祭りのおみこし作り、運動会、生活発表会等の対外的な活動になるとたちまち子ども本位の姿勢がく

ずれて、時には子どもにはむずかし過ぎるような課題を一方的に与えていたこともあった。

これは保育に対する父母の評価への対策でもあったと思う。しかし今や我々はもっと真剣

に父母に対して幼児教育とは何か、何が大切なことを啓蒙していかなければならない。

保育参観、保育のスライドやビデオで日常生活を紹介する会、方針の説明会、園だよりや

クラスだより、個人面接を通して、園で遊んでいることにどんな意味があるか、子どもが

どう育ってきているかを保護者が納得のいくようきめ細かに伝えていかなければならない。

そうした上でもっと子どもレベルのできるプレゼントや運動会、生活発表会の在

り方を模索しなければならぬ。

とかく鼓笛隊や文字や数、水泳等を教える目に見える成果の上がる保育に心を奪われが

ちな父母を、成果が見えにくい心情、意欲、態度を育てようとする保育に対して、やっぱ

りこの園に入れて良かったと思わせるには、見せかけの行事ではなく、一人一人の確かな成長がなければならぬ。

☆

夏に園長研修があり、県の指導主事による新幼稚園教育要領の解説を聞いた後、休憩時間にある園長がしみじみと「先生方はよくわかっているのです。書かせても立派に書く言葉ではわかっているのです。でもただ一つ、できないのですよ」と話しておられた。

これまで子ども前面に出て、活動を与え、教え続けてきた教師にとって、「ねらいや内容を押さえてそれを環境に含ませて、幼児が活動したくなるように構成する」とか、「遊びを通して成長に必要な経験を持たせる」「一人一人の充実した園生活の展開を保障する」ということは、一つ一つ言葉ではわかるが、具体的に三十五人ものクラスの子どもの目の前にして困惑するのも無理もないことである。

優良園の視察や公開保育研究会でいくつかの幼稚園を見学し、我が園を振り返って見るに、表から見た印象はどこも良く似ている。むしろそのパターンは画一的にさえ思える程である。部屋の中にブロック、ままごと、テラスの水遊びなどのコーナーが設置され、廊下やプレイルームには巧技台や踊るコーナーがある。子どもは自由に行き来して興味のある活動にとりかかるとなっている。

以前よく公開保育で見かけた、大仕掛のセツトを作ったような保育や、子どもをさんざん練習させたような劇場ごっこ<sup>①</sup>のスタイルは影ひそめ、一斉課題活動などはどこを探しても見当たらない。

環境による保育が全国一斉に指導され、広がることは良いことであるが、その質を思うと気がかりなこと無ではない。それは何年もこの保育をしている間には、子どもを十分成長させられずに小学校に送り出した苦い

経験があるからである。保育内容や教師のかわり方が希薄で子どもが育ち切れないのは、ちよūd栄養の悪い食事ばかり与えられて成長が悪いのと同じである。教育課程や指導計画、週案会議、日案、日誌とシステムはあっても、日々を保育するのは担任の裁量である。自主性を育てる保育が単に保育のスタイルとしてとらえたならこれは大へん危険なことである。

☆

かつて教師が一方的に活動を与えていた時代は、適性の有る人も無い人も、新人もベテランも同じような保育内容を持ち得たし、何年か経験を積むことによって、静かにさせ方や説明の仕方も上達するということもあったが、今日、子どもの育ちや状況を見ながら臨機応変に援助したり、環境を変えていったりする能力はかなり適性を要することである。子どもの育ちは担任の力量にまかされ、教師

の力の個人差がそのままクラスの子どもの育ちの差になってしまふのである。保育力は経験の差というより適性や人間力（魅力、感性、創造性、表現力等）の違いによるように思われる。若く経験が少なくても、子どもと呼吸を合わせる能力にたけた人は、労することなく生き生きとした学級経営をし、子どもをしっかり育てる。一方何年経験があっても適性に欠けた人は、一生懸命努力するのだが、仲間関係も育たず、バラバラなクラスに苦勞し、子ども力も伸ばし切れなかったりする。保育者養成機関は安易に就職をすすめることなく、二年間の間に幼児教育が自分に向いた仕事かどうか見極めさせることも大切だと思う。保育は教えられないものである。保育原理も保育内容も、細々したやり方等を教えることはできるが、感性や人柄や、人としての魅力を含めた保育そのものは教えられない。

☆

今後はともかくとして、現状では、保育は、ずばぬけた適性のある人や、情熱のかたまりのような人や、いささかも努力をおしまぬ人にしかできない仕事になっては困るのである。適性の無い人や、鈍感な人や、怠惰な人も大勢保育者になっている現在、そういう人でもある程度は育てていける方策を考えなければならぬ。

良い保育は、これまであまりに保育者の心掛けや努力におしつけすぎてはいないだろうか。一人一人を大切にしている保育や個性を尊重する保育をするためには、一クラスの人数を二十五名程にしなければ普通の保育者にはゆき届かない部分が出てくると思う。三十五人も四十人も四歳児が部屋や廊下を自主的にかけまわっては安全確保だけでも手いっぱいになってしまう。

さらに環境による保育ということで、保育の机を片付け、畳のコナーを入れたり、

つい立てを立てたり、大型箱積木を入れて子どもの自主的な活動を促そうとするが、昼食時になるとたちまち室内を片付けて、重いデコラ貼りの机を十脚は出さなければならぬ。お弁当はともかく、給食にはどうしても机がいるのである。環境による保育を実施するためには、本来食堂があるか、物を片付けなくても机の出せる広さの保育室が用意されなければならない。現状では担任教師の労働は日々大へんなものである。

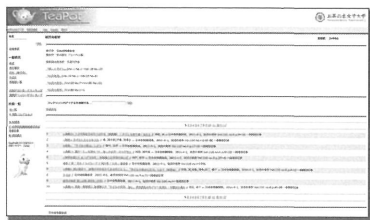
定員も施設、設備もそのままに、保育者だけでなく努力せよというだけでは保育はなかなか良くはならないと思う。

(つくば市立桜南幼稚園)

## 幼児の教育 バックナンバーを WEBページで公開中

「幼児の教育 TeaPot」で

検索



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/52377>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成27年発行の第114巻第1号までご覧になれます。